

リスニング指導からスピーキング指導への橋渡し —スキット・コンテストを活用した中学校における実践—

石川正寛¹⁾ 西垣知佳子²⁾

¹⁾千葉大学・教育学部・附属中学校 ²⁾千葉大学・教育学部

A Study of Instruction Aimed at Improving English Speaking Ability Among Japanese Junior High School Students

Masahiro ISHIKAWA Chikako NISHIGAKI

The Attached Junior High School, Faculty of Education, Chiba University
Faculty of Education, Chiba University

本研究は、千葉大学附属中学校と千葉大学教育学部が行った連携研究の報告である。本連携研究グループではこれまでに英語の「リスニング指導」に関して継続的に効果をあげ結果を公表してきた。本研究は従来の研究を発展させ、培ったリスニング力をスピーキング力へと橋渡しするための指導を試みた結果である。

今回の指導実践の効果はプリテスト・ポストテストに加え、1) 校内で開催したスキット・コンテスト、2) 全国から応募の集まるNHK「新・英語スキット大会—基礎部門」への参加という形で評価した。その結果、1) については公開研究会で行った発表会で参観者から「生徒たちの英語のうまさに驚いた」という感想を多くいただいた。2) については、応募総数361チームの中から原稿とテープ審査で上位8位に残り、NHK放送センターで開催された決勝大会では、優勝を果たし、最優秀賞をいただいた。優勝大会の様子は3回にわたり全国放送された。

This paper is a report on the results and achievements realized in a joint project between the Faculty of Education of Chiba University and its affiliate junior high school. In previous joint projects, which began in 1997, we succeeded in improving students' listening ability. This study is a continuation of that research and is aimed at bridging listening training with speaking training to foster students' basic speaking abilities. 'Basic speaking abilities' in this study refers to the ability to reproduce English skits with proper pronunciation, intonation, and rhythm.

Thirty students participated in this study. They first studied authentic listening material through CALL (Computer-Assisted Language Learning) until they were thoroughly familiar with the material. With CALL they were exposed to the material repeatedly and received extensive oral input. After they gained an auditory image of the material, the teacher clarified the various sound connections and shifts of intonation which appeared in the material.

The effects of instruction were measured by means of both listening tests and English skit contests held inside and outside the school. On listening tests, the participants achieved statistically significant improvements. At a skit contest held inside the school, their performances were evaluated highly by English teachers from other schools. At a nationwide English skit contest held by NHK, the team from Chiba University's Junior High School won the first prize out of 361 teams. Based on these results, we concluded the approach we employed to bridge listening instruction with speaking instruction was successful.

キーワード：リスニング指導 (listening instruction) スピーキング指導 (speaking instruction)
スキット・コンテスト (skit contest) CD-ROM教材 (CD-ROM material)

1. はじめに

千葉大学教育学部附属中学校と千葉大学教育学部の連携研究グループでは、「実践的コミュニケーション能力の育成」を研究目的に据え、平成9年度より共同研究を行ってきた。連携研究の1年目には、「実践的コミュニケーション能力」の養成のために「何を」「どのように」指導するべきか、具体的な指導内容と方法を検討するた

めに先行研究調査を行った。

種々のアンケート調査の結果を見ると、日本人英語学習者が「もっともつきたい英語力」として筆頭にあげるのは、一般に「話す力」である(土屋, 2000, 88-89; 佐藤, 2004, 8; 宮田, 2004, 59)。一方、表1に示した「言語習得過程」「日常生活」「発話の制御機能」などを観察すると、実は「聞き取れなければ話せない」、つまり「話す力の育成」にはその基本として「聞く力の育成」が不可欠であるという言語行動の事実があることも判明した(西垣・中山, 2004, 17-18)。

連絡先著者：

表1 リスニングが重要な理由

言語習得過程の観察
◇見本となる音声インプットの必要性 ◇十分な量のインプットの必要性
日常生活の観察
◇日常の言語活動の中で「聞く」時間が最も長い ◇聞けなければ会話は続かない
発話制御機能の観察
◇発話の際には耳を使って発話を制御している

上記の観察結果に加え、「リスニング能力」の重要性は、下にあげる研究者らの指摘からも示唆される。

Teaching the comprehension of spoken language is of primary importance if the communication aim is to be achieved. (W.M. Rivers, 1981, 151)

自然言語は話しことばから出発しており、音声はその土台であることは言うまでもない。幼児の言語の4技能は、通常「聞く」「話す」「読む」「書く」の順序で発達していく。つまり、「聞く」が言語習得の出発点で、その上に他の3技能が積み重なっていく。(JACET教育問題研究会編, 1998, 77)

Today the centrality of listening in language learning is well established. An appropriate aural comprehension program that targets learner listening at all levels of instruction is an essential for second language competence. (Morley, 2001, 70)

表2 リスニング指導で考慮すること

学習心理学・認知心理学
◇動機づけ ◇処理の深さ ◇維持リハーサルと精緻化リハーサル ◇分散学習 ◇Top-down と Bottom-up の情報処理 ◇記憶容量 ◇情報処理容量 ◇報酬と強化 ◇KR 情報
第二言語習得研究・英語教育学
◇十分な量のインプット ◇理解可能なインプット ◇興味・関心・ニーズへの配慮 ◇自然な音声素材の活用 ◇知らない間に繰り返し聞ける学習ステップ ◇テストはあっても指導なし ◇理解のレベルへの配慮 ◇学習内容の高い定着率 ◇応用力への高い転移

以上の調査結果を踏まえたうえで、筆者ら連携研究グループでは「実践的コミュニケーション能力の育成」の第一歩は、「リスニング力の養成」であると結論し、リスニング力の向上を目指した指導を試みることにした。

続いて「どのような方法で」リスニング指導を行うかについて検討した。表2は学習心理学、認知心理学、第二言語習得研究、英語教育学などの観点から、リスニング指導を行う際に留意すべき項目を取り上げ、まとめたものである(西垣・中山, 2004, 18-20)。そして表2に示した留意項目を網羅する指導法として、千葉大学名誉教授竹蓋幸生先生の提唱する「3ラウンド・システム」(竹蓋, 1997)に注目をした。本指導法は、長年にわたり高い指導実績を積み重ねている指導法で、その指導効果が検証されている。

以上のような先行研究の調査結果を踏まえ、研究グループでは、平成10年に「実践的コミュニケーション能力」の養成を目指し「3ラウンド・システム」に基づく「リスニング力養成」のための指導実践を開始した。そして平成12年度までに、教室での集団指導、CD-ROMを使ったコンピュータ室でのCALL授業など、様々な「形態」と、異なる「指導者」によって、高い指導効果を繰り返し確認してきた(中山・西垣, 2000, 2001, 2003; 西垣・中山, 2004)。

本連携研究グループでは「リスニング力の育成」については、これまでに実証的研究を積み重ね、高い指導効果を検証してきた。平成13年度は次の指導段階として、リスニング力をスピーキング力へと「橋渡し」するような指導実践を行いたいと考え、研究を行った。

2. 本研究の目的

本研究の目的は培ったリスニング力をスピーキング力へと発展させるために、スピーキングの基礎力の育成を目指した実践指導を行い、その効果を検証することであった。

3. リスニング指導の方法

附属中学校においてリスニング指導に採用している「3ラウンド・システム」について、その理論と方法を以下に概観する。

「3ラウンド・システム」では学習者の英語力レベルに対して難易度が高い「自然に近い音声素材」を学習する。一般に、自然な音声素材は難易度が高過ぎて、中学生の英語力と教材の間に大きなレベルのギャップがあり、指導上、教材として機能しない。

「3ラウンド・システム」は、このギャップを埋めるために、「タスクの種類」、「考えさせるためのヒント」、「教材の学習順序」など様々な工夫を施し、教材の「難しさ」を意識させずに、楽しく、実践的なリスニング力を育成する指導法である。

図1に示したように、ひとつのユニットには3~5個の複数の音声教材が含まれる。ひとつのユニットは3つのラウンドに分けて学習するが、各ラウンドでは徐々に難易度が高くなる学習目標が設定されていて、1ラウン

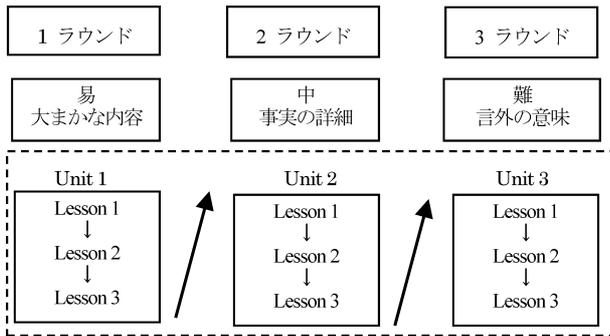


図1 「3ラウンド・システム」における学習の方法

1ラウンドでは「大まかな内容」、2ラウンドでは「はっきりと明言された事実の詳細」、3ラウンドでは「言外の意味や話者の真意」などを聞き取る。

タスクや学習順序の他にも、タスクに解答するためのヒント情報、単語やフレーズ、文化背景の知識、発展情報など教材の難易度を下げるための工夫がちりばめられている。

これらの工夫の結果、同じ教材を聞き取りの焦点を変えながら、何回も繰り返し聞き取ることで、気づかない間に十分な音声インプットが与えられることになる。

4. インプットからアウトプットへ

Krashen (1982) は第二言語の発達について「理解可能なインプット」が十分に与えられれば、言語習得は無意識的に進められる」というインプット仮説 (input hypothesis) を提唱した。

一方、インプット仮説に対してSwain (1985) は「理解可能な」インプットは習得に必要なではあるが、十分ではなく「言語習得には理解可能なインプットに併せて、理解可能なアウトプット (comprehensible output) が必要である」と主張した。理解可能なアウトプットとは、伝えようとする内容が聞き手に理解されるアウトプットで、学習者がアウトプットを産出しようとするによって、第二言語の習得が促進されるというものである。

日本のように、日常生活において英語を必要としないEFL (English as a Foreign Language) の環境では、シンガポールや香港のようなESL (English as a Second Language) の環境下での英語習得とは異なって (金谷, 2002, 7-8), 何の後押しもなしにインプットがアウトプットへと自然に転移することは期待できないと考えられることから、Swainの唱えるようにアウトプットにはアウトプットのための訓練が必要であろうと考える。

5. スピーキングの基礎力：何を指導するか

平成10年告示の中学校学習指導要領では「話すこと」の言語活動として、次の4点を取り上げている。

- (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音すること。
- (イ) 自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話すこと。
- (ウ) 聞いたり読んだりしたことについて、問答したり

意見を述べ合ったりすること。

- (エ) つなぎの言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が長くように話すこと。

一般にスピーキングの指導について論じる際にはfluency (流暢さ) に重きを置くのか、accuracy (正確さ) に重きを置くのかという対比がされることがある。さらに発音の良さと言った「音声」、発話の「内容」、語彙・構文・状況に応じた適切な言語使用と言った「形式、構造、使用域 (register)」を重視する立場などもある (馬場, 1997, 15)。

以上のことを考慮すると、上記学習指導要領の(ア)については「より良い発音」の指導を目指し、(イ)については、自分の考えや気持ちを聞き手に正しく伝えるために「正しい語彙と構文、状況に応じた適切なことばの使用」を目指すことになると考えた。また、上記指導要領の(ア)と(イ)は主にaccuracyに関わる指導事項で、(ウ)と(エ)は主にfluencyに関わる指導事項と考えた。

荒井 (2001, 47) はaccuracyとfluencyについて、最初から「正しく、しかも流暢に」と両方を求めるのでは、負担が大きくなりすぎるので、練習の際には段階に応じて、どちらかに焦点をあてて区別するべきだと指摘している。

また、荒井はfluencyを高め、自由に会話ができるようになるには、あらかじめ必要な表現が含まれた会話や文を言えるようにすることが大切であると述べ、そのための指導の方法として次の4つの段階をあげている。

- 第1段階 モデルとなる会話を理解する
- 第2段階 会話を覚える
- 第3段階 会話をさせる
- 第4段階 覚えた会話を元にして応用・発展させる

本研究では「スピーキングの基礎力」の養成を目指すのが、以上のことを踏まえ、基礎力として主に「accuracy」の育成に重きを置く。具体的には、学習指導要領の(ア)と(イ)の項目に関わる言語活動を中心に行い、(ア)についてはたとえネイティブ・スピーカーのような発音でなくても、できるだけ標準に近い「通じる発音」を目指す。(イ)については、自分の考えや気持ちを正しく伝える力を養成するための基礎として、中学生が日常生活で使えるような表現を含む教材の「暗唱と発表」を行うこととした。

6. 発音指導と暗唱指導について

6.1 発音指導

発音指導に関して「ネイティブ・スピーカーのような発音を目指すべきだ」という目標は近年掲げられることが少なくなり、日本人に特徴的な「ジャパニーズ・イングリッシュ」の発音に対しても積極的に支持するという立場 (齊藤, 1994) もある。しかしながら、本研究では発音もコミュニケーション能力の一部と考え、より円滑なコミュニケーションを目指し、初めから目標を低く掲げるのではなく、聞き手に不快感を与えずに理解される発音、自信を持って話せる発音、「聞いて楽にわかる (comfortably intelligible) 発音」 (馬場, 1997, 101) を目指した。

6.2 暗唱指導

スピーキングの練習として行われる個々の単語や文の発音練習、構文練習などは、それ自体コミュニケーションではないという指摘がある。しかしながら、基本本文の暗唱はどのような指導法をとるにせよ必要である（米山, 2002, 102）といわれ、また英語の達人と呼ばれるような人の共通した勉強法として「表現の丸暗記」が挙げられる（佐藤, 2000, 26-27）ことから、スピーキングの基礎力養成のための訓練として暗唱活動を行うこととした。慣用表現をマスターすれば、日常的で身近なコミュニケーションがある程度成立する（泉, 2003, 42；佐藤, 2000, 26-27）と言われているので、このような活動は、自由に使える表現を拡大し、fluencyの育成につながるものである。

暗唱活動を行うにあたっては、次のような指摘に留意した。

- ・模倣・暗唱活動は機械的で単調な作業になり、生徒が退屈してしまうことになりがちである。
(米山, 2002, 102)
- ・暗唱させる場合には、よく意味内容の理解できたものを正しい発音で、聞き手に話しかけるようにする。
(伊藤他, 1995, 64)
- ・暗唱を宿題として課すからには、授業中の練習で、家で数回読めばある程度暗唱出来るという状態にまで、指導しておくべきである。
(伊藤他, 1995, 65)

以上の点を踏まえ本研究では、「3ラウンド・システム」に基づくリスニングの指導で教材の深い内容理解を達成し、その過程で十分な音声インプットを与えて強固な聴覚イメージを作り上げ、無意識の繰り返し学習の中で気がついたら教材を暗唱していたというような十分な準備活動を経て、「スピーキングの基礎力」の育成のための活動に移った。

7. 研究の方法

7.1 授業：授業は「コンピュータでリスニング」という「選択の時間」の中で行われた。1回50分の授業を週2回、コンピュータ教室で行った。

7.2 学習者：千葉大学教育学部附属中学校の3年生の30名が受講した。そのうち1名は、プリテストを受験しなかったため、データ分析の際には除外した。

7.3 リスニングの指導：リスニング指導にはCALL用CD-ROM教材『Listen to Me!』シリーズ中のFirst Listening（竹蓋, 2001：以下FL）*を活用した。FLは「3ラウンド・システム」に基づいて開発されたリスニング学習用教材である。

FLは、大学生の補習用レベルの教材で、「自然に近い音声素材」を使い、中学生には難易度の高い教材ではあるが、中学3年生にも難しさを意識させずに、楽しく、かつ実践的なリスニング力を育成できる。半期の授業では（附属中学校は2期制をとっている）、CD-ROMに含まれる6つの全てのUnitを終了することを目標とした。

FLは様々なトピックとジャンルの英語が学べる教材である。表3にはFLに含まれる音声教材を示した。

表3 First Listeningに含まれる音声素材

Unit 1	Situational Dialogs
Unit 2	Messages
Unit 3	Student Life (1)
Unit 4	Student Life (2)
Unit 5	Humor and Science
Unit 6	Learning about the World

7.4 スピーキングの基礎力の指導

スピーキングの基礎力の養成には、表4に示したUnit 1のなかのPart 1, Section 3を、はじめにCD-ROMを使ってリスニング学習を行って音声インプットを十分に与えた後、クラス全体で発音練習を行った。

発音練習では、個々の単語、語と語の連結による音変化、リズム、イントネーションなどについて1行ごとに説明を加え、教材を練習した。

例えば表4の教材の1行目に出てくるMomでは、最後のmの音は両唇をしっかりと閉じて発音すること、気持ちこもっているためにイントネーションが上がって下がる特別なものになっていることなどを説明した。ま

表4 発音練習のために使った音声素材

- | |
|--|
| : Mom! Look at this dress! It doesn't fit!
It's too tight. I'm gaining so much weight.
: You look fine, Janet.
: No. I don't! I want to be thin. I'm going on a diet tomorrow.
: You don't need to go on a diet. Just eat three good meals a day and not so many fattening snacks!
: But I love snacks like soda pop, candy bars, potato chips...
: Yes, Janet, but those foods aren't very good for you. You gain weight when you eat a lot of those things, because they have so much fat and sugar in them.
: But, Mom, what about the bag of potato chips I just bought?
: I'll worry about the potato chips for you, Janet.
: I'm sure you will! |
|--|

た 'look' の語末の k の音と 'at' の語頭の a の音, さらに at の t と this の th の音の連結について説明した。

発音練習の際には, 場合によっては, カタカナ表記も利用した。カタカナの利用については従来の「カタカナ英語」とは異なる, 「カタカナを利用してできるだけ英語の発音に近づけよう」という「近似カナ表記」の理念(島岡, 2002)を参考にした。例えば, milk は「メウク」で, 「take it easy」は「テイキツリーズイ」となる。

カタカナ表記の利用については, 賛否両論あるが, ここではあくまでも補助的に, 学習者の必要に応じて, 確認のために利用した。聴覚的なイメージを視覚的に確認することで, 特に下位の学習者の補助的な指導手段として役立てた。

CD-ROM教材を使って教材の内容を深く理解し, さらに発音練習で音変化, イントネーションなど, 自然な会話としての表現の方法を理解した後, 最後に仕上げとして, シャドーイングを行った。CD-ROM教材ですでに音声インプットが十分に与えられていたためか, 教材を耳で聞いて再生する練習は短時間で終了することができた。

その後, ペアごとに分かれて, 教室のなかでスキットの練習を行った。演ずる際は, その人物になりきって感情を込めることを指導し, ジェスチャーの指導も行った。また, 練習の際には, 場面を表す小道具なども用意した。

このようなスキット暗唱のための指導と練習には, 2 回の授業をあてた。

8. 評価の方法

学習効果の検証は, 「リスニング力の向上」, 「スピーキングの基礎力の向上」をそれぞれ分けて検証した。

8.1 リスニング力の向上

リスニング力の向上については, 学習した内容がどれだけ習得されたかを観察するために, CALL中の教材を使って, 自作のプリテスト, ポストテストを作成した。自作テストは37題の cloze 形式の「音声聞き取る」テストと, 12題の open-end 形式の「内容理解」に関するテストであった。

テストは予告をせずにプリテスト, ポストテストと同

一のテストを使って行った。使用したテストの信頼性は, 他のテストとの相関で, 音声聞き取りテストは $r = .759$ で, 内容理解テストは $r = .702$ であったので, 十分な信頼性があったものと判断した。

8.2 スピーキングの基礎力の向上

「スピーキングの基礎力の向上」を目指した指導の効果は, 1) 校内スキット・コンテストの開催, さらに, 培った実力を外部のコンテストで試すために, 2) 全国規模で行われた学外のスキット・コンテストへの参加という形で行った。

上記の2)では, 校内スキット・コンテスト終了後にクラスの中で有志を募り, オリジナルのスキットを創作し, 2003年度NHK「新・英語スキット大会(基礎部門)」へ応募した。応募にあたってはスキットの原稿とスキットを録音したMDをNHK放送センターに郵送した。

このような学内コンテストの開催と学外コンテストへの応募は, 指導効果の検証のためだけでなく, 学習者の「動機付け」のためという目的もあった。

日本のような英語が日常的に使われることのないEFLの環境では, 英語を話せるようになる必要性がなく, それが英語の上達しない日本人の最大の問題と言われるなか(JACET教育問題研究会, 1998, 90; 金谷, 2002, 8), 金谷(2002, 13-14)の指摘するように, スキット・コンテストの活用は英語学習の必要性を人工的に作り出す「ニーズの創出」のための有効な手立てであると考えた。

9. 指導実践スケジュール

以上のような指導実践およびその評価のためのスケジュールは表5にまとめた。

10. 結果と考察

指導の効果はリスニング力, スピーキングの基礎力に分けて分析, 検証した。

10.1 リスニング指導の効果

リスニング指導の効果は, cloze test および内容理解

表5 指導日程と活動内容：平成15年度前期(本校は2学期制をとっている)(50分×26回)

年 月 日	活 動
H15年 前期 授業	5/13 プリテストとガイダンス
	5/20~6/3 CALL 学習
	6/13, 19, 20 教材を利用した音声練習
	6/25 学内スキット大会—予選
	6/27 公開研究会, 学内スキット大会—決勝戦
	6/30~7/15 CALL 学習
	9/9~10/7 CALL 学習
	10/8 ポストテスト
	10月 2003年度NHK「新・英語スキット大会—基礎部門」—応募
H16年 3/7 2003年度NHK「新・英語スキット大会—基礎部門」優勝大会—参加	

テストで検証したが、その結果は図2と図3に示した。

clozeテストは、プリテストが63.5点、ポストテストが81.7点で、18.2点の得点上昇が確認された。内容理解テストではプリテストが40.2点、ポストテストが79.7点で、39.5点の得点上昇が確認された。

t-検定の結果、両テストの得点上昇は有意な得点差 ($t(28)=11.78$, $t(28)=10.92$, $p<.01$) であったことが確認されたことから、学習した教材における聞き取り力は向上したものと判断した。

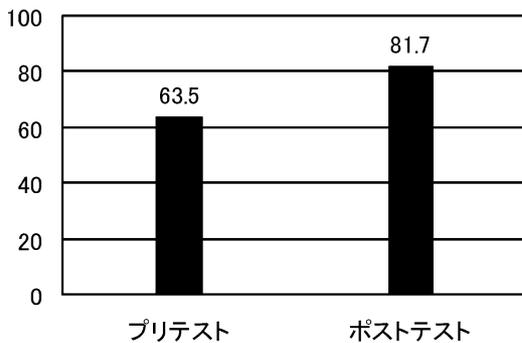


図2 クローズテストの結果

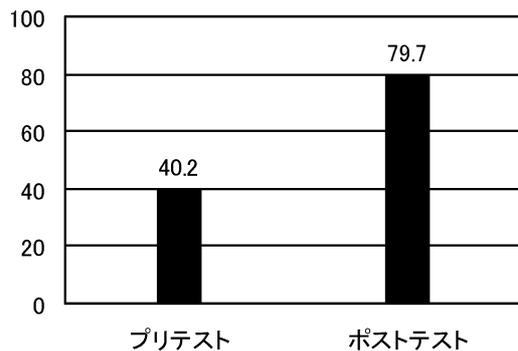


図3 内容理解テストの結果

10.2 スピーキングの基礎力の指導の効果

スピーキングの基礎力の向上については、1) 校内スキット・コンテストの開催、それに2) NHK「新・英語スキット大会(基礎部門)」への応募というかたちで検証したが、それぞれ分けて検討する。

10.2.1 校内スキット・コンテスト

校内スキット・コンテストは授業の中で予選を行い、上位6チームによる決勝戦を「公開研究会」で行った。その結果、公開研究会参観者から次のようなコメントをいただいた。

- ・outputとしての発音の良さに驚かされた。authenticな素材を使う意味がここにあると思う。
- ・生徒たちの英語のうまさに驚いた。本当に中学生なのかと疑ってしまうほどだった。
- ・どの生徒もアクセントやイントネーションのつけ方がしっかりしていて英語の発音がとても上手だったことに驚いた。普段からきちんと正しい発音を教わっているのだろうと思った。
- ・どの生徒も恥ずかしがることなく、まるでネイティブのようなイントネーションやジェスチャーで話してい

たことにとても驚いた。

- ・中学生の英語能力の高さに驚いた。スピーキングの力を伸ばすために、どのような授業を行っているのかを知りたいと思った。

10.2.2 校外スキット・コンテストへの応募

2003年度NHK「新・英語スキット大会—基礎部門」に有志を募り応募したところ、結果は、全国から応募のあった361チーム中の上位8チームに残り、平成16年3月7日にNHK放送センターで行われた「優勝大会」に進出することとなった。

優勝大会に向けて発音練習、ジェスチャーなどのパフォーマンスの練習を重ね、本番に臨んだが、その結果は優勝を飾り、「最優秀賞」を受賞した(図4)。優勝大会の様子は平成16年4月2日、NHKラジオ第2放送で3回放送された。

参加した3人のうち、2人は中学校に入学してから英語の学習を始めた者たちであった。

以上の結果、指導理論に基づいて作成されたリスニング教材を使い、自然な音声英語のインプットを十分に与えた後、適切な指導を行えば、向上したリスニング能力は、発音・リズム・イントネーションなどのスピーキングの基礎力に転移をすることが確認できたと考える。

11. 今後の展望

本研究では、fluencyとaccuracyのうち、スピーキングの基礎力としてaccuracyの養成を試みた。しかしながら、accuracyの訓練だけでは、fluencyの養成には不十分である。

実際の言語運用ではコミュニケーションの目標を解決するために、自分の意志で「伝える内容」と「形式」を選び、相手の反応を見ながら自分の「発話を修正」し、「意味交渉(negotiation of meaning)」を行うのであるから、今後は瞬時に、しかも適切に相手の投げかけに対応できるよう、fluencyの育成を目指した指導実践へと発展させたいと考える。



図4 2004年NHK語学テキスト5月号より

参考文献

荒井貴和。(2001)「話すことの指導」、『あたらしい英語

- 科教育法—小・中・高校の連携を視座に』。伊村元道，茂住實男，木村松雄編著，学文社。
- 馬場哲生．（1997）『英語スピーキング論—話す力の育成と評価を科学する 英語教育研究リサーチ・デザイン・シリーズ⑥』，河源社。
- 伊藤健三，伊藤元雄，下村勇三郎，関典昭，渡辺益好．（1995）『英語の新しい学習指導』，リーベル出版。
- 泉恵美子．（2003）「スローラーナーを励ます授業実践—スピーキング能力育成を目指して」，『英語教育』，November，42-43。
- JACET（大学英語教育学会）教育問題研究会編．（1998）『英語科教育の基礎と実践—新しい時代の英語教員をめざして』，三修社。
- 金谷憲．（2002）『英語授業改善のための処方箋—マクロに考えミクロに対処する 英語教育21世紀叢書』，大修館。
- Krashen, S. (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*, Prentice-Hall International.
- 宮田学，鹿野緑，石田知美，岡部純子，内田政一．（2004）「生徒がつけた英語の通信簿新」，『英語教育増刊号』，大修館，59-65。
- 望月昭彦（編著）．（2001）『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』，大修館。
- Morley, J. (2001) 'Aural Comprehension Instruction: Principles and Practices.' In Celce-Murcia, M. (ed), *Teaching English as a Second or Foreign Language*. Heinle & Heinle, 69-85.
- 中山博，西垣知佳子．（2000）「中学校における聞き取り指導の実践とその効果の検証」，『紀要』，関東甲信越英語教育学会，14，11-19。
- 中山博，西垣知佳子．（2001）「附属中学校における英語コミュニケーション能力の養成—「3ラウンド制の指導理論に基づく実践とその分析」」，『千葉大学教育学部研究紀要』，第49巻Ⅱ，73-82。
- 中山博，西垣知佳子．（2003）「附属中学校の「選択の時間」におけるリスニング指導の効果—CALL用CD-ROM教材の活用—」，『千葉大学教育学部研究紀要』，51，255-263。
- 西垣知佳子，中山博．（2004）「実践的英語コミュニケーション能力の養成のための理論と実践」，『教科教育学研究』，日本教育大学協会第二常置設置委員会編，22，17-30。
- Rivers, Willga M. (1981) *Teaching Foreign-Language Skills Second Edition*, the University of Chicago Press.
- 齊藤栄二．（1994）「国際化時代に要求される英語とは—ジャパニーズ・イングリッシュ是非論」，『英語教育』，March，8-10。
- 佐藤知代．（2004）「選択教科外国語（英語）における聞く力を伸ばす指導教材の開発—DVDを利用したコースウェア作り—」，平成15年度千葉県長期研修生研修報告書。
- 佐藤久美．（2000）「教師のためのリスニング力アップ法」，『英語教育』，October，26-28。
- 島岡丘．（2002）『カタカナで完全マスター英会話』，丸善。
- Swain, M. (1985) 'Communicative competence: some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development.' In S. Grass & C. Madden (eds.), *Input in Second Language Acquisition (Series on Issues in Second Language Research)*, Newbury House, 235-253.
- 竹蓋幸生．（1997）『英語教育の科学—コミュニケーション能力の養成を目指して』，アルク。
- 竹蓋幸生．（2001）（監修）First Listening. 特定領域研究(A)領域番号120「メディア教育利用」計画研究（カ）「外国語CALL教材の高度化の研究」英語グループ。
- 土屋澄男，広野威志．（2000）『新英語科教育法入門』，研究社出版。
- 米山朝二．（2002）『英語教育 実践から理論へ 改定増補版』，松柏社。
- 文部省．（1998）『中学校学習指導要領』。
- 謝辞 本指導は，文部科学省科学研究費補助金『特定領域研究(A)高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究』（研究代表者：竹蓋幸生）により開発された「Listen to Me!」シリーズのFirst Listeningの使用許諾をいただき活用させていただきました。ここに感謝申し上げます。